

白亜の大神殿を見上げた瞬間、膝が震えた。

初夏の陽射しに磨き抜かれた円柱が眩しく輝き、空へと伸びる尖塔の十字が目刺さる。聖ルクレシア王国の心臓とも呼ばれるこの神殿に、私が足を踏み入れる日が来るなんて、つい一月前までは想像もしていなかった。

石畳に降り立つと、足元から冷気が這い上がってきた。真夏だというのに、この神殿の敷地だけは空気が澄んで、肌寒いほどに涼しい。聖なる土地とはこういうものなのだろうか。頬を撫でる風にさえ、どこか厳かな気配があった。

馬車から降り立った私は、白絹のドレスの裾をそっと握りしめる。指先はひどく冷たく、背筋には嫌な汗が滲んでいた。絹の手触りが、指の震えを余計に際立たせる。

私、ミレイユ・ド・ヴァルモンは、今この瞬間、姉セレスティアの身代わりとして――偽りの聖女として、神殿の門をくぐろうとしている。

露見すれば、処刑。

家族もろとも、爵位剥奪の上、極刑。

それを承知で、私はここに立っている。

「何をぼんやりしているの。早く歩きなさい」

後ろから侍女の冷たい声が飛んでくる。私は慌てて頷いた。銀色に染め直された髪が、歩くたびに肩を滑る。この髪の色も、姉と同じに整えられた眉の形も、全て偽物。鏡を見れば、そこには私ではなく、姉セレスティアの姿が映っているはずだった。

七日前の夜のことを、私は今も鮮明に覚えている。

ヴァルモン伯爵家の食卓で、父が神殿からの召喚状を読み上げた時、姉セレスティアは歓喜の悲鳴を上げた。「聖女候補」——百年に一度、神託によって選ばれる神聖な存在。その響きに、姉は夢中になった。華やかな就任式、民衆からの崇拜、国中からの贈り物。姉が好きそうなもの全てが、その称号には付随していた。

「これで私、王妃様より偉くなれるわね！」

シャンパンを掲げて笑う姉の姿を、私は部屋の隅から眺めていた。食卓の主役は常に姉で、私の席は末席。両親の目が私に向くことは、ほとんどなかった。姉の光が強すぎて、私の影は誰の目にも留まらない。それが私の日常だった。

あの夜、姉が聖女候補として選ばれたと知った時、私はほんの少しだけ、胸の奥が疼くのを感じた。嫉妬ではなかったと思う。ただ——もしか

したら、私にも何か役割があるのかもしれない、と。そう夢想してしまつた自分が、馬鹿らしかった。

けれど、その熱が冷めたのは、わずか三日後のことだった。

神殿には厳格な戒律があつた。白い祭服以外は身につけられず、髪飾りも宝石も禁じられる。朝は夜明け前に起きて祈祷し、日に三度の聖務に励み、男性と二人きりになることは一切許されない。社交界の華やかさも、甘い菓子も、流行のドレスも、全てが取り上げられる生活。

「そんな牢獄みたいな場所、行きたくないわ!」

姉は食器を投げつけて泣き喚いた。父も母も困り果てた顔で姉をなだめ、そして――私を見た。

「ミレイユ。あなたが代わりに行きなさい」

母の声は、まるで庭の雑草を抜くように事務的だった。耳を疑った。でも、続く言葉で、聞き間違いではないと悟った。

「でも、お母様。それは不敬罪に問われます。もし露見すれば、処刑されるのは私だけでは済みません」

「だから露見しなければいいのよ。あなたは目立たない子だし、顔だつてセレスティアとよく似ている。髪を染めれば、誰も気づきやしないわ」「そうよミレイユ、お願い！」姉は涙を浮かべて私の手を取った。「私、どうしても神殿に閉じ込められるなんて耐えられないの。あなた、私の可愛い妹でしょう？ ね？」

姉の爪が、私の手の甲に食い込んだ。指輪がきらきらと光る。その光を見ながら、私は静かに諦めた。

断れるわけがなかった。この家で、私は常に「余り物」だった。姉が生まれたあと、両親は第二子を望まなかったらしい。私の存在は事故のようなもので、幼い頃から「セレスティアの予備」として育てられてきた。姉が欲しがる物は姉のもの、姉が要らない物が私に回ってくる。それが当たり前の家だった。

新しいドレスは姉のもの。誕生日のケーキは姉のもの。家庭教師の褒め言葉も姉のもの。

——それでも、私は家族を愛していた。少なくとも、愛そうと努力していた。

でも今回だけは、事情が違う。

——私には、秘密があった。

幼い頃から、私には「聖なる気配」を感じ取る力があつた。花の蕾が明日咲くか、病人が治るか、井戸の水が涸れるか。そういつたことが、肌で分かる。六つの頃、庭師が倒れたのを見て「大丈夫、今夜には治ります」と言った時、母の顔色が変わつたのを今でも覚えている。翌朝、庭師がけろりとした顔で仕事に戻ってきた時、母は私を自室に呼びつけ、震える声でこう言つたのだ。

「ミレイユ。そういうことは、二度と口にしてはいけません」

それが、母が私に初めて真剣な顔で告げた言葉だつた。

以来、私は自分の力を封じ込めて生きてきた。気味が悪いと疎まれ、薄気味悪い子だと陰で言われるのを、私は知っていたから。教会のミサで祭壇の光が妙に眩しく感じて、古い聖遺物の前を通るたびに指先が熱を帯びても、私は何も言わなかつた。言えなかつた。

だから——もしかしたら、と思っていた。

神託で「聖女」として選ばれるべきは、本当は姉ではなく、私なのかもしれない、と。

神殿の神託は「ヴァルモン家の娘」と告げたと聞いている。姉の名を指定したのは、伯爵家の方だった。

でも、それを口にする勇氣はなかった。神託は絶対で、私がしゃしゃり出ることも許されない。ならばせめて、姉の身代わりとしてこの役目を果たし、家族の役に立とう。そう決めて、私はここまで来たのだ。

神殿に向かう馬車の中で、私は何度も窓の外を眺めた。王都の街並みが流れていく。石畳の道、花売りの少女、パン屋の煙、教会の鐘。見慣れた景色のはずなのに、今日はどれもが遠く、色褪せて見えた。

——これが見納めになるかもしれない。

そう思うと、不思議と涙は出なかった。恐怖が体内を満たしすぎて、他の感情が入り込む隙がなかったのかもしれない。

「聖女セレスティア様、ようこそ大神殿へ」

門の前で、白い祭服の神官たちが深々と頭を下げる。私は喉を引き攣らせながら、姉の名を名乗った。

「……セレスティア・ド・ヴァルモンです。本日より、神に身を捧げます」

自分の声とは思えなかった。喉の奥が焼けるように痛い。嘘をつくことに、私は慣れていなかった。

神官たちに案内され、私は長い大理石の回廊を歩いた。両側の壁には歴代の聖女たちを描いた肖像画が掛かっている。銀髪の乙女、金髪の乙女、

黒髪 of 乙女――皆、神々しい光に包まれていた。その瞳は穏やかで、それでいて何かを見透かすような深みがある。

一歩進むごとに、私の靴の音が大理石に反響する。カッン、カッン、と。その音だけが、静寂を破る唯一のものだった。聖具の微かな光が、天井のステンドグラスから降り注ぐ陽光と混ざり合い、空気そのものが金色に染まっているように見える。

私は俯いた。偽物の私が、この回廊を歩いていいのだろうか。彼女たちの視線に、耐えられない気がした。

――けれど、不思議なことに。

指先から、温かなものが広がっていくのを感じた。肌で感じる「聖なる気配」は、これまでどんな場所よりも濃密だった。まるで、この空気が私

を歓迎しているかのように。その矛盾が、私をさらに混乱させた。偽物のはずの私を、神殿そのものは受け入れているように感じられたから。

中央の広間に到達した時、神官たちが一斉に足を止め、深々と頭を垂れた。

「――猊下がお越しになります」

その声と同時に、正面の大階段の上に、一つの影が現れた。

私は顔を上げた。そして、息を呑んだ。

階段の踊り場に立っていたのは、一人の若い男性だった。純白の祭服に、金糸で縫い取られた法衣を羽織っている。腰まで届く長い髪は、磨き抜かれた銀そのもの。切れ長の瞳は、陽光を閉じ込めたような澄んだ金色。肌は陶器のように白く、唇は薄紅色。まるで、聖堂の天井画に描かれた大天使がそのまま現世に降り立ったかのような姿だった。

——教皇ラファエル・エル・ルクレシア。

史上最年少、二十四歳の若さで就任した教皇。絶世の美貌ゆえに「生ける聖像」と呼ばれ、その姿を一目見ることが民衆の憧れとされる男。

噂は聞いていた。けれど、噂の数十倍は美しかった。私は自分の目を疑った。こんなに美しい人間が、本当にこの世に存在するのか。

彼が、ゆっくりと階段を下りてくる。

カツ、カツ、と響く靴音が、不思議と私の心臓の鼓動と重なった。

一段、また一段。近づくにつれ、私は呼吸の仕方を忘れていく。長い銀髪が動きに合わせて背後で揺れ、陽光に透けて淡い光を放つ。周囲の神官たちが一様に目を伏せているのも、無理はないと思った。あの瞳を正面から受け止められる者など、きっと、そう多くはいない。

そして、階段の最後の一段を降りた彼が、こちらを向いた。

金色の瞳が、まっすぐに私を射抜く。

——心臓が、止まった。

ほんの一瞬のことだった。彼の瞳が私を捉えた刹那、時間が止まったように感じた。彼の視線は私を通り過ぎず、まるで私の奥底まで見透かすように、深く、深く、突き刺さった。

肌が粟立つ。背中を冷たい汗が一筋、滑り落ちていく。

悟られた。

理屈ではなく、肌が告げていた。この方は、私の正体を見抜いている。

銀色に染めた髪も、姉の名を名乗ったことも、私が隠してきた力のことも

——全て。

血の気が引く。膝から崩れ落ちそうになるのを、必死で堪えた。処刑される、と頭の中で誰かが叫んでいた。この場で全てが終わる。家族も、家名も、私の命も。

けれど、彼の唇は、告発の言葉を紡がなかった。

「……ようこそ、神殿へ」

低く、蜜のように甘い声だった。唇の端にうつすらと微笑が浮かぶ。それは慈愛に満ちた微笑みに見え、同時に――どこか、獲物を見つけた捕食者のような色を帯びていた。

「長旅でお疲れでしょう。聖女の間へご案内します」

そう言つて、彼は白い手袋に包まれた手を、こちらへと差し伸べた。この手を取つてはいけない。

本能が叫んでいた。この手を取った瞬間、私は戻れない場所へ連れて行かれる。何かが、決定的に変わってしまう。

けれど、私に拒む権利などなかった。周囲には神官たちの目がある。差し出された教皇の手を跳ねのけることなど、許されるはずもない。震える指先で、私はそっとその白手袋に触れた。

白手袋越しでも、彼の手の熱が伝わってくる。不思議なほど、温かかった。

ゆっくりと引き寄せられ、彼の腕に導かれる。周囲の神官たちの前では、あくまで礼儀正しく、教皇が聖女をエスコートするだけの動作に見えるはずだ。

けれど、彼の指先は、私の手のひらを白手袋の上からそっと撫でた。ほんの一瞬の、誰にも気づかれない仕草。その微かな動きに、私の全身の神

経が反応する。彼は私に触れた感触を、確かめているかのようだった。まるで、獲物の柔らかさを指先で測るように。

身体の芯が、ぞくり、と震えた。

それは恐怖だったのだろうか。それとも、違う何かだったのだろうか。当時の私には、まだ、分からなかった。

私と彼の距離が縮まった瞬間――

「怯えなくていい」

耳元で囁かれた。他の誰にも聞こえない、小さな、小さな声で。

吐息が首筋をかすめる。銀の髪が、私の頬に触れた。

「――きみの秘密は、僕が守ってあげるから」

金色の瞳が、蕩けるように細められる。

その瞳の奥に、私は確かに見た。慈愛でも、神の威光でもない、もっと人間的で、もっと生々しい色。それは、欲望の色に似ていた。

その瞬間、私は悟った。

この方は、聖人君子などではない。

ここは神聖な場所などではない。

私は、もっと恐ろしい場所に――足を踏み入れてしまったのだと。

差し伸べられた手に導かれ、私は回廊の奥へと歩き出す。後ろを振り返ることは、もう許されなかった。

廊下の先、奥へ、さらに奥へ。大神殿の中心部へと、私は連れて行かれる。道の両側の壁には、もはや肖像画はなかった。代わりに、蔦のように絡み合う金の装飾が、燭台の光を受けて妖しく輝いている。誰も通らない廊下。神官たちの足音さえ、いつの間にか聞こえなくなっていた。

聖域の最奥へ近づくにつれ、空気は重く、濃く、密度を増していった。呼吸をするたび、胸の奥に何かが沈み込んでくる。甘く、痺れるような何かが。

私の指を握る彼の手が、ほんの少しだけ——力を込めた。逃がさない、とでも言うように。

回廊の最奥にある扉が、音もなく開かれた。

現れたのは、溜息が漏れるほど豪華な一室だった。天井は教会の聖堂のように高く、金と白で統一された装飾が壁を覆っている。中央には天蓋付きの寝台、窓辺には祈祷用の小さな祭壇、壁際には書架と長椅子。女性が一人で暮らすには広すぎる、まるで小さな宮殿のような部屋。

窓からは中庭が見えた。白い薔薇が満開で、その向こうには高い塀が聳え立っている。脱出は不可能だろう、と頭の隅で冷静に判断する自分がいた。塀の向こうは、おそらく神殿の別の区画。そのさらに向こうに、一般の信徒が入れる大聖堂がある。私がここに閉じ込められれば、外の世界とは完全に隔絶される。

空気は、かすかに白檀の香りがした。祈祷に使われる聖なる香。慣れ親しんだはずの香りなのに、この部屋の中では不思議と、甘く、濃密に感じられた。

「こちらが、聖女の間です」

教皇ラファエルが、静かな声でそう告げる。随行していた神官たちは、扉の外で深々と一礼すると、音もなく退がっていった。

扉が閉じられる。重い木の扉が石造りの枠にはまる、ごん、という音が、広い部屋に反響した。

——二人きり。

その事実には、背筋が凍りついた。神殿の戒律では、聖女は男性と二人きりになってはならないはず。けれど教皇は例外とされているのか、それとも彼が例外を作ったのか。どちらにせよ、私には拒む術がない。

私は部屋の中央で立ち尽くしたまま、次の言葉を待った。

ラファエルはゆっくりと歩き、私の前で足を止める。背の高い彼を見上げる形になり、私は思わず視線を落とした。彼の祭服の裾が、大理石の床にかすかな影を落としている。

「……緊張していますね」

穏やかな声だった。

「いえ、その……長旅で、少し」

「そう」

短い相槌。けれど、彼は私の嘘を受け入れるつもりはないらしかった。白い手袋に包まれた彼の指が、ゆっくりと動く。もう片方の手で、片方ずつ、手袋を外していく。素肌の長い指が現れた。節のはっきりした、美しい手。祈りに使われるはずの手。

その指先が、光を受けて白く輝く。爪までも磨き抜かれた、貴族の手だった。けれど、よく見ると、人差し指の第二関節に、細い傷痕のようなものがあつた。剣を握る者の指ではない。何か別の、鋭いもので傷を付けたことのある手。その傷痕を見つけた瞬間、私はなぜかひやりとした。この人は、美しさだけでできているのではないのだ、と。

ぽとり、と手袋が床に落ちる音がした。

「――顔を、上げていただけますか」

甘い声の奥に、有無を言わせない響きがあった。私は、震える顎をゆつくりと持ち上げた。

金色の瞳が、私を捉える。近い。あまりにも近い距離で。彼が、ふっと微笑んだ。

「本物のきみは、もっと美しい瞳をしているんだろうね」

「……え」

心臓が跳ねた。

「その髪の色も、染めたものだ。地毛は――薄い栗色かな。肩の少し上で切り揃えられていた。違うかい？」

息が、止まった。

私の本当の髪色。それは、家族と、一部の侍女しか知らないはずのもの。

目の前がくらりと揺れた。一月前、私がこの髪を染めたのは、ヴァルモン家の地下の一室でのことだった。窓もなく、誰にも見られない場所で、侍女頭が姉の髪色に合わせて色を調合した。神殿に到着するまでの道中も、常に帽子を被り、紗のヴェールで顔を隠し、決して他人に素顔を見せないようにしていた。染料は二度塗り、毎朝入念に手入れして、不自然な生え際が出ないように細心の注意を払ってきた。

それなのに——この方は、たった数秒で、全てを見抜いた。

「どう、して……」

掠れた声で、それだけを絞り出した。

ラファエルは、私の頬にかかった銀色の髪の一房を、そつと指先で摘み上げた。そして、匂いを確かめるように、自分の鼻先に近づける。

「染料の匂いにする。上質なもののだけど、完全には消せていない」
彼の唇の端が、微かに吊り上がった。

「それに——きみから感じる気配が、『聖女』そのものだ」
瞳孔が、すつと細くなる。捕食者のそのように。

「きみは、真の聖女だ。ミレイユ・ド・ヴァルモン嬢」
真名を、呼ばれた。

その瞬間、私の足から力が抜けた。崩れ落ちる、と悟った刹那——彼の腕が、素早く私の腰を支えていた。

温かい。

祭服越しに伝わる彼の体温。そして、密着する彼の胸の、思いのほか引き締まった感触。

「……お許してください」

私は震える唇で、やっとそれだけを言った。

「どうか、お許してください。家族を、家族だけは、どうか……」

処刑される、という恐怖が、今になって現実味を帯びて襲ってきた。私一人ならまだいい。けれど、伯爵家全員の首が飛ぶ。両親、姉、使用人たち。私が偽者であることが公に告発されれば、ヴァルモン家は跡形もなく滅ぼされる。

涙が、勝手に溢れた。

「お願い、します……告発、だけは」

「——しないよ」

穏やかな声が、私の言葉を遮った。

顔を上げると、ラファエルは困ったように微笑んでいた。まるで、迷子の子猫を見つけた時のような、優しい表情で。

「告発しない。約束する」

「え……」

「きみを処刑になんて、するわけがない」

ふわりと、肩から重荷が下りたような気がした。けれど同時に、別の種類の重さが胸に落ちてくる。助けてくれる、という安堵と、何かを求められるだろう、という予感。

彼のような立場の人間が、見ず知らずの小娘に慈悲を施すはずがない。私は頭のどこかで、それを理解していた。

私の腰を支えていた彼の手が、背中へと滑る。そのまま、ゆっくりと、強く抱き寄せられた。

祭服の生地に、頬が押し付けられる。彼の心臓の音が、耳元で聞こえた。とくん、とくん、という、不思議と落ち着いたリズム。

「ただ——条件がある」

低い声が、頭上から降ってくる。

「条件……ですか」

「きみを、この神殿から一步も出してあげない」

え、と息を呑んだ。

「……それは、つまり」

「きみの偽装に、僕が協力するということさ。『聖女セレスティア』として、表向きはそう振る舞えばいい。儀式はできる限り僕が簡略化する。きみの正体は、僕と、ごく限られた信頼できる者しか知らない」

そこで彼は言葉を切り、私の頤に指をかけた。くい、と持ち上げられる。

「その代わり——きみは、二度と伯爵家には戻れない。社交界にも出られない。他の男の目に触れることも、許さない」

金色の瞳が、蕩けるように細められる。優しげなのに、底のない深淵のように昏い光を湛えた瞳。

「きみは、この神殿の最奥で、僕の庇護のもとに生きる。それが、きみが生き延びる唯一の道だ」

理解が、ゆっくと追いついてくる。

これは——慈悲ではない。

これは、取引だ。いや、取引ですらない。一方的な宣告だ。私は、彼の「所有物」になることを受け入れるか、この場で告発されて死ぬか。その二択しかない。

頭の中で、両親の顔が浮かんた。姉の笑顔が、使用人たちの暮らしが浮かんた。私が首を縦に振れば、あの人たちは今まで通りの生活を続けられる。誰も、私の消息を気にしないだろう。聖女セレスティアは大神殿に留まる——それだけで、家族にとっては満足な結末なのだから。

けれど、と私は思った。

どうして、この人はこんなことを私に言うのだろう。

初対面のはずなのに。私は、この人に一体何の価値があるというのだろうか。

「……どうして、私を」

震える声で、私は尋ねた。

「どうして私に、そんな取引を……私のような者に、猥下が、そこまでなさる理由が、分かりません」

ラファエルは、ふっと笑った。

そして、私の耳元に唇を寄せて、囁いた。

「――欲しいから」

背筋が、ぞくり、と震えた。

「きみが欲しい。それ以上の理由が、要るかな」

耳朶に、彼の唇が軽く触れた。触れた、ような気がした。はつきりとは分からない。けれど、耳の奥に、彼の吐息の熱が残っている。

私は、ひゅっと息を呑んだ。

「きみを一目見た瞬間から、決めていた。きみを逃がすつもりは、僕に
はない」

腰に回された彼の腕の力が、少しだけ強くなる。祭服越しなのに、彼の
体温がそのまま肌に伝わってくるようだった。

「哀れだと思ったわけじゃない。同情したわけでもない。僕はもつと――
俗物的な理由で、きみを欲している」

耳元で、低く、蜜のような声が続く。

「きみの肌が、きみの髪が、きみの声が、きみの力が、全部欲しい。他
の誰にも渡したくない。この神殿の最奥に閉じ込めて、僕だけが愛でてい
たい」

そんな、と私は思った。

そんな言葉を、聖職者が、紡いでいいはずがない。これは告白でも、求愛でもない。もっと生々しく、もっと独善的な、捕獲宣言だった。

聖典には、聖職者の純潔を謳う章がある。教皇ともなれば、婚姻も許されない立場のはず。それなのに、この方は――。

身体が、動かない。

抵抗しなければいけない。拒まなければいけない。そう頭では分かっているのに、膝に力が入らなかった。彼の腕の中から、逃げ出せない。

「……猊下」

「ラファエル、と呼んでくれないかな。二人の時は」

「……そんな、恐れ多くて」

「命令だよ」

有無を言わせない声で、彼は告げた。

甘やかな命令だった。けれど命令は命令。逆らえば何が起きるのか、想像するのも恐ろしい。私は、唇を噛んだ。

そして――私の頤を掴んでいた手が、離れる。代わりに、私の手の甲を、彼は恭しく両手で捧げ持った。

跪いた。

教皇が、私の足元に、跪いたのだ。

純白の祭服が大理石の床に広がり、長い銀髪が絨毯の上に流れ落ちる。

その光景は、まるで一幅の宗教画のようで――けれど、描かれている構図は、明らかに神聖なものではなかった。

聖女に跪く教皇。本来なら、それは信仰の証として美しく尊ばれる光景のはず。けれど目の前にあるのは、祈りではなかった。これは服従の儀で

すらなく、まるで——何か、もっと暗くて独占的な、契約の儀式のようだった。

彼は、私の手の甲に、そっとくちづけた。

唇の感触が、生々しく肌に伝わる。手袋を外したままの彼の指が、私の指を絡め取る。熱い。人の体温とは思えないほど、熱かった。

くちづけは一度では終わらなかった。指の付け根、手首の内側、脈の打つ場所へと、唇は順番に降りていく。そのたびに、私の身体の奥で、痺れるような震えが走った。

「ミレイユ」

私の名を、呼ばれた。

家族が呼ぶのとは違う。侍女が呼ぶのとも違う。私の名前が、こんなにも蜜のように、甘く響くものだったなんて。私は、自分の名前を愛された

ことがなかった。いつも事務的に呼ばれ、叱責と共に呼ばれ、用事を言いつけられるために呼ばれてきた。

だから、分からなかった。名前を呼ばれるだけで、胸が震えるというところが。

「――逃げようとは、思わないで」

見上げてくる金色の瞳に、蕩けるような光が宿る。

「逃げてでも無駄だよ。この神殿の中で、僕の中から逃れられる場所なんて、どこにもないから」

微笑みと共に告げられた言葉は、優しい響きを纏っているが、その中身は鎖そのものだった。

ずしりと、見えない首輪が、私の喉に巻かれた気がした。

私は、何も言えなかった。

頷くことも、拒むことも、逃げることもできず、ただ彼の金色の瞳に見上げられるままに、その場に立ち尽くしていた。

足元に跪いた男の美しさは、もう目に入らなかった。私の視界を満たしていたのは、ただ、彼の瞳の奥にある深い深い色だけだった。あの色に吞まれてしまえば、きっと二度と浮上できない。本能が警告を発している。けれど身体は、一步も動かない。

そして、自分の胸の奥で――

恐怖とは違う、もっと別の何かが、小さく、けれど確かに、灯っていることに気づいていた。

温かなものだった。優しさに似て、けれど優しさではない何か。誰かに求められる、という体験が、これほどまでに人の胸を歪ませるものと、私は知らなかった。

それが何なのか、当時の私にはまだ、名前を付けられなかった。

けれど、今になって思う。

あの瞬間——扉の閉ざされた聖女の間で、跪いた教皇に手を取られた、あの瞬間が。

私の人生で初めて、誰かに「欲しい」と望まれた、最初の夜の始まりだったのだと。

囲われる、ということが、これほど甘美で息苦しいものだとは知らなかった。

神殿での生活が始まって、七日が経った。

朝は夜明け前、小鳥のさえずりと共に目を覚ます。白檀の香りが漂う寝台から身を起こすと、いつの間にか控えていた侍女——ラファエルが個人

的に選んだという物静かな老女——が、暖かな沐浴の支度を整えてくれている。

白い祭服に身を包み、侍女に髪を結ってもらう。銀色に染めた髪は、毎朝塗り直さなくてもいいように、神殿の秘薬で深く染め直されていた。

「今日も、お美しくていらっしやいます」

侍女の穏やかな声に、私はぎこちなく微笑む。この家では——いや、実家でも——私が誰かに「美しい」と言われたことは一度もなかった。

朝食は、聖女の間の小さな食堂で摂る。焼きたてのパン、果実、温かなスープ、そして蜂蜜を垂らした紅茶。全てが吟味された最高級品で、食器には金の縁取りが施されている。

そして、決まってこの時間に、あの方がやって来る。

「おはよう、ミレイユ」

扉が開き、純白の祭服を纏った教皇ラファエルが現れる。長い銀髪を緩く束ねたその姿は、朝の光の中で息を呑むほどに美しい。

「……おはようございます、ラファエル様」

私は俯きがちに応える。最初の夜に彼を名で呼ぶことを命じられて以来、この呼び方にもなんとか慣れてきた。けれど、毎朝彼の姿を見るたびに、心臓が勝手に跳ねるのは、いつまで経っても変わらない。

彼は当然のように私の向かいに座り、私の侍女に下がるよう目配せをする。朝食の間、二人きり。これが日常になっていた。

「今朝は、どんな夢を見たのかな」

「……特には、何も」

「そう？ 僕はきみの夢を見たよ」

何気なく紅茶に口をつけながら、彼はとんでもないことを言う。私は喉を詰まらせかけ、慌てて紅茶を飲み込んだ。

「どんな……夢を、ですか」

「それは、秘密」

くすり、と彼は笑う。金色の瞳が、いたずらっ子のように細められる。それでいて、私を見る視線は、時折ぞっとするほど熱を帯びている。朝の挨拶の中に、夜の残り香のような艶が混じる。それが、この人の日常だった。

パンを千切る私の手元を、彼はじっと眺めていた。視線が痛い。私の咀嚼する動作一つ、指の動き一つを、この人は全部観察しているのだ。食事の時くらい、少し休ませてくれないだろうか——そう思いながらも、口には出せない。

「ミレイユ。蜂蜜は好き？」

「……はい、好きです」

「じゃあ、これは特に気に入ると思うよ」

彼は自分の前に置かれた小さな壺を、私の側にそっと押してくれた。銀の匙で蜜をすくって、私のパンの上に垂らしてくれる。教皇が、自ら。国中の民衆が崇め奉る最高位の聖職者が、私のパンに蜂蜜を塗っている。

この光景を見た者がいたら、信じてくれないだろうと思った。

朝食の後は、祈祷の儀だ。

大聖堂の正面には出ず、奥まった礼拝堂での略式の儀式のみ。ラファエルが「身体が弱い聖女」という設定にしてくれたおかげで、民衆の前に姿を晒す必要はほとんどない。私は祭壇に向かって膝をつき、祈りの言葉を唱える。

聖典の一節が、滑らかに口から紡がれていく。意外なことに、私はこの祈りが嫌いではなかった。家で押し殺していた「聖なる力」が、ここでは自由に流れ出る。水面下に押し込まれていた水が、ようやく地上に噴き出すような感覚。

——不思議なことに、祈りはごく自然に口から零れた。

子供の頃から、私の中に眠っていた力。聖なる気配を感じ取る力は、この神殿では明らかに活性化している。祈ると、指先から温かなものが流れ出るのを感じる。聖なる泉の、水が湧き出るように。

祭壇の燭台の火が、私の祈りに合わせて揺らめく。花瓶の白百合が、朝の光を浴びて、わずかに頭をもたげたように見えた。気のせいではないと思う。この神殿の空気そのものが、私の力に呼応している。

「やはり、きみだね」

祈りを終えた私の背後で、ラファエルが静かに呟く。彼は礼拝堂の隅で、腕を組んで私の祈る姿を眺めていた。

「神殿に満ちる聖なる気配が、きみが来てから目に見えて強くなっている。僕の予想通りだ」

私は、ただ俯いた。自分が本物の聖女だと認められるのは、嬉しいことのはずだった。けれど、その事實は、私がより一層「この方の手の中にある」ことを意味していた。本物の聖女だからこそ、彼は私を離さない。離したくない。

昼は書架のある部屋で読書をして過ごす。ラファエルが選んで届けてくれた本ばかりで、どれも面白かった。恋愛小説、旅行記、異国の植物図鑑、古い聖典の注釈書。私の好みを、彼はもう正確に把握していた。

午後、窓辺で本を読んでいると、扉をノックする音がする。

「入るよ」

返事を待たずに現れるのは、いつもラファエルだった。祭服の上着を脱ぎ、白いシャツの袖をまくった姿で。神殿のどこかで執務をしていた合間に、こうして私に会いに来る。

「何を読んでいるの」

「……北の国の、旅行記を」

「ああ、あの本か。氷の湖が出てくる章がいいよ。僕が好きな場面だ」
そう言いながら、彼は私の隣の長椅子に腰を下ろす。いつの間にか、距離が近い。彼の肩が、私の肩に触れるほどに。

本を読み聞かせるように、彼は頁を指でなぞる。その指が、時折、私の手の甲をかすめる。触れた、のか、たまたま当たっただけなのか、判然としないほどの軽さで。けれど、確実に、意図的に。

肌が、痺れる。

頁をめくる時、彼の銀髪が私の頬を撫でる。鼻先に、白檀と、彼自身の微かな匂いが届く。淡くて甘い、人を眠りに誘うような香り。

集中できるはずが、なかった。

そして、こうした午後の時間、彼は気まぐれに、まるで何かを確かめるように、私の髪を一房すくって、指に巻きつけたりする。

「きみの髪、本当は栗色なんだよね。早く染め直す必要のない身分にしてあげたい」

ぽつり、と零れる独り言のような言葉。返事を待つてはいない。けれど、その響きに込められた意味を考えると、私は頁の上で目が泳いだ。

「染め直す必要のない身分」とは、何のことだろうか。聖女ではなく、何か別の立場に、私を置きたいというのだろうか。

けれど、それを問う勇氣はなかった。答えを知ってしまうのが、怖かった。

夕方になると、私のための湯浴みの支度が整う。

「きみの世話は、全部僕がしたいくらいなんだけど」

ラファエルがそう零したのは、神殿に来て三日目の夜のことだった。私は湯浴みの準備だと侍女に告げられた矢先、あの方が部屋に入ってきたことで、耳まで真っ赤になった。まさか、と青ざめた私に、彼は困ったように微笑んだ。

「冗談だよ。さすがに、そこまではしない」

——「まだ」しない、と聞こえた気がしたのは、私の気のせいだっただろうか。

湯浴みの後、私は絹の夜着に着替える。若草色の、軽く透けるほど薄い生地のもの。「きみの肌が透けるように」などと冗談めかして彼が選んだ夜着だった。真面目に反論しようとした私を、彼は笑って遮った。「きみの夜着くらい、僕の趣味で選ばせて」と。

夜着だけではない。部屋に届けられる花、食卓に並ぶ菓子、読書の灯りに使う蠟燭の香りに至るまで、全てがラファエルの趣味で選ばれていた。彼は私の周囲を、少しずつ、けれど確実に、「自分色」に染めていく。見えない鎖で括られていくような感覚が、日ごとに濃くなる。

そして、夜。

一番厄介な時間が、始まる。

寝台に入る支度を終えた私の部屋に、彼は毎晩、必ず訪れる。

「おやすみ、僕の聖女」

そう言いながら、寝台の縁に腰を下ろし、私の額にくちづけを落とす。最初は、ただそれだけだった。子供を寝かしつけるような、穏やかな挨拶のくちづけ。

けれど、日を追うごとに、その儀式は少しずつ、けれど確実に、変質していった。

額から、こめかみへ。

こめかみから、頬へ。

頬から、耳朵の下へ。

そして、昨夜。

彼の唇は、初めて——私の唇の端に、触れたのだ。

触れただけの、羽のように軽いくちづけ。それでも、私は眠れなかつ

た。夜通し、彼の唇の感触が、私の肌に残り続いていた。寝返りを打った

びに、枕に唇の端を押し付けては、彼の感触を思い返している自分に気づき、かつと顔が熱くなった。自分は、一体どうしてしまったのか。

そして、今夜。

私は、寝台の上で膝を抱えて座っていた。いつも通りの若草色の夜着。いつも通りの時間。扉の向こうで、ラファエルの足音が近づいてくる。

——何が怖いのか、自分でも分からなかった。

怖いのは、彼の行為が進展することだろうか。

それとも、進展しないことだろうか。

この七日間、私の身体は、少しずつ彼の手に慣らされていった。それは自覚している。朝の微笑み、昼の指先、夜の唇。積み重ねられた全ての瞬間が、私の警戒を一枚一枚剥がしていった。今の私は、最初の夜のような、逃げ出したほどの恐怖は感じていない。

感じているのは、別のもの。

彼がもう来てくれないかもしれない、と思った時の、胸の冷たさ。それを認めるのが、怖かったのだ。

扉が、ノックされる。返事をする前に、彼はもう入ってきていた。

夜の祭服を緩く纏ったラファエルが、微笑みながら歩み寄る。寝台の縁に腰を下ろし、いつものように、片手で私の頬に触れた。

けれど、今夜の彼は、いつもとは違った。

私の頬に触れた指が、ゆっくりと顎を撫で、首筋を伝い、鎖骨の窪みで止まる。夜着の襟元。生地の下で、心臓が暴れていた。

金色の瞳が、私を見据える。

「ミレイユ」

低い声。

「そろそろ、次の段階に進んでも、いいかな」

息が、止まった。

これが何を意味するのか、分からないほど、私も無知ではなかった。修道院で行われる「聖女の純潔の儀」のことも、民間で囁かれる「教皇の聖婚」の伝承のことも、私はそれなりに知識として知っていた。

けれど、それは伝説や教義の話であって、自分の身に起こることだとは思っていなかった。

姉が嫁入りの前に母から教わっていた話を、扉越しに盗み聞いたこともある。恥じらいながら、それでも誇らしげに笑っていた姉。自分には無縁の話だと、私はその時、庭を駆ける小鳥をぼんやり眺めていた。

それなのに、今、その話が自分の身に降りかかろうとしている。それも、相手はこの国の最高位の聖職者。

唇が、震える。拒みたいのに、声が出ない。

——いや、本当は。

私は、拒みたかったのだろうか。

自分の中に芽生えた、暗くて甘い何か。それを、私は七日間ずっと、見ないふりをしてきた。彼が私を「欲しい」と言った最初の夜から。祈りの後ろ姿を見つめる、あの視線の熱を浴びた時から。ほとんど気まぐれに触れる指先に、肌が痺れた、あの瞬間から。

見ないふりを、してきた。

ラファエルの指が、夜着のリボンに、そつとかかる。

解くには至らず、ただ、指先で弄ぶように、リボンの端をつまんで揺らす。

「……嫌なら、拒んでくれていい」

彼は囁いた。

「今夜だけは、きみが拒むなら、僕はおとなしく帰るよ」

優しい声だった。初めて、本当に私の答えを待っていてくれる声。

けれど、その金色の瞳は、答えが分かっているかのように、蕩けた光を宿している。

私が、拒めないことを。

否、私が――拒まないことを。

私は、ゆっくりと顔を上げた。目の前には、月光に照らされた彼の美しい顔。

銀の髪が、窓からの月光を受けて淡く光っている。まるで大天使のような、けれど今夜は、その美しさの下にある雄々しいものが、はつきりと透けて見えた。

そして、私の唇は、勝手に動いた。

「……お任せ、します」

消え入りそうな、小さな声で。

けれど、確かに、私自身の声で。

ラファエルの瞳が、わずかに見開かれ、そして――蕩けるように、細められた。

その瞳の奥で、押し殺されていた熱が、静かに解き放たれていくのが見えた。

「……いい子だね、ミレイユ」

低く囁かれた声は、これまで聞いたどの声よりも甘く、深く、そして危うかった。

夜着のリボンを、彼の長い指が、ゆっくりと、一本、ほどく。

さらに、と絹の感触が肌の上を滑り、夜の空気が胸元に触れた。

私の、初めての夜が、始まろうとしていた。

絹のリボンが、ほどけていく。

ラファエルの長い指が、夜着の胸元を留めていたリボンを一本、また一本と、丁寧に解いていく。焦りのない、儀式のような手つき。彼は一度も、私の瞳から視線を外さなかった。

金色の瞳に、私の姿が映っている。頬を紅潮させ、唇を震わせ、膝の上で指を握りしめる、情けない姿が。

「そんなに強く握らないで」

彼の空いた手が、私の拳に重ねられる。握り込んでいた指を、一本ずつ丁寧にほどいてくれた。緊張で冷えきった私の指に、彼の唇が落ちる。

たったそれだけの仕草で、肌がびりびりと痺れる。七日間、見えない熱に焦らされ続けた身体は、彼の唇の僅かな接触にも過敏に反応した。

胸元の最後のリボンが、解ける。

夜着の前身頃が、ふわりと開く。月光が、露わになった私の素肌に降り注いだ。鎖骨の窪み、乳房の膨らみ、薄い腹部。全部が、彼の金色の瞳の前に晒される。

とっさに腕で隠そうとした手首を、彼は優しく、けれど有無を言わさぬ強さで押さえた。

「隠さないで。ずっと、見たかったんだ」

低く掠れた声。喉仏が上下する。

初めて見る、聖職者の仮面を脱ぎ捨てた彼の顔。金色の瞳には、普段の余裕も、優雅さもなかった。ただ、飢えた獣のような熱だけが、そこに渦巻いていた。

寝台に、ゆっくりと押し倒される。

背中に触れる絹のシャツが、ひんやりと冷たい。けれど、その冷たさを感じる余裕も、すぐに奪われた。

ラファエルが、祭服の留め具を外していく。純白の布が肩から滑り落ち、彼の素肌が露わになった。

聖職者らしからぬ、引き締まった身体。肩の厚み、胸板の広さ、腹部の筋肉の浅い凹凸。薄い灯りに照らされた彼の姿は、聖像どころか、神話に描かれる戦いの神のようだった。

覆いかぶさってきた彼の重みに、寝台が軋む。彼の銀髪が垂れ落ち、頬をくすぐった。

「怖がらないで」

額に、唇が押し当てられる。

「今夜は、きみを怖がらせるようなことは、何一つしないから」
優しく、甘く、けれど低く掠れた声。その声に、鼓膜が震えた。

最初のくちづけは、唇に落ちた。

ちゅ、と音を立てて、軽く触れるだけのもの。羽のように軽く、花びらのように柔らかい。

けれど、二度目は違った。

ラファエルの唇が、私の唇に深く重なる。舌先が、そつと唇の合わせ目をなぞった。身体を強張らせた私の口が、そのわずかな刺激に反応して、ほんの少しだけ開いてしまう。

その隙間から、彼の舌が侵入してきた。

「んっ……♡」

初めての感触に、鼻から甘い声が漏れた。

温かく、柔らかく、けれど確かな意志を持った異物が、私の口腔を探る。

私の舌を、彼の舌がそつと撫でる。ヌル、ヌル、と粘膜同士が擦り合わせられるたびに、背筋を電流のような痺れが駆け抜けた。

ちゅぷ、ちゅぷ、と濡れた音が、静かな寝室に響く。

もつと、もつと、と身体が彼の舌を欲していた。私の舌が、おずおずと応える。未熟な動きで、彼の舌に絡めようとする。それを察したラファエルは、くつ、と喉の奥で笑って、すぐにまた主導権を奪い返した。

ちゅ♡……くちゅ♡

唇が離された時、二人の間に、銀色の糸が一筋、引かれた。

「可愛いね」

ラファエルが、蕩けた声で呟く。親指で、私の唇を撫でる。

その指が、ゆっくりと顎を伝い、首筋を撫で下ろしていく。鎖骨の窪みで止まり、円を描くようにくすぐる。くすぐりたいのに、私は笑えなかった。指が触れた場所から、熱が生まれ、身体の奥へと流れ込んでいく。

首筋に、唇が押し当てられた。

ちゅっ、と吸われて、肌がびくりと跳ねた。続いて、もう少し強く。

「あ……っ♡」

甘い痛み。彼の唇が吸い付いた場所に、赤い痕が残っているはずだった。

彼はそれを幾つも、鎖骨のあたりに刻んでいく。

やがて、唇が下へ降りていく。鎖骨の窪み、胸の膨らみの縁。露わになった乳房に、銀の髪がかかる。その髪 of 感触だけで、乳首がつんと立ち上がるのを感じた。

ラファエルの瞳が、その変化を見逃さなかった。

「ここ、触れてないのに、もう硬くなってる」

くすりと、笑う声。

「……言わ、ないで……」

恥ずかしさに涙目になる私の、色づいた頂を、彼の指が、とん、と軽く弾いた。

「ひあっ♡」

電流のような刺激が、乳首から脳天へと突き抜けた。

驚いて自分の口を押さえる私を見て、ラファエルは目を細めた。

「いい声。もっと聞かせて」

指先が、乳首の上で円を描く。くり、くり、と回すように撫でられる。

反対の手は、もう片方の乳房を優しく揉みしだいた。柔らかく、けれど執拗に。両方の乳房を、全く違うやり方で同時に嬲られる。

むにゅ、むに♡……くりくり♡

指の腹で、ぷくり、と膨らみ始めた乳頭を挟み込まれる。指と指の柔らかい部分で、硬くなった先端を転がされる。その優しさが、余計にいやらしかった。

「あっ……あっ♡……や、あっ……♡」

脚の間が、ジン、と熱を持ち始めた。自分の身体なのに、知らない場所に、知らない熱が広がっていく。

彼の唇が、胸元に降りていった。

硬く立ち上がった乳首に、彼の唇が、ちゅ、と触れる。

「んう……っ♡」

直接、粘膜で触れられた感触に、背中が弓なりに反った。舌先が乳頭を、ちろり、と舐める。つい、つい、と先端を弾くように。

「ふぁ……っ♡あ、あっ♡」

舌が、円を描いて乳輪をなぞる。乳首を舌の腹でゆっくりと押しつぶし、また解放する。その間、反対側は彼の指が担当していた。親指と人差し指で、きゅっ、と挟み込まれ、優しく擦られる。

唾液でてらてらと濡らされた乳頭が、月光を受けて妖しく光る。ラファエルの舌は、もう遠慮がなかった。じゅっ、と音を立てて深く吸い上げ、口に含んで舌先で廻り回す。

ちゅぱっ♡

「ひあっ……んっ♡ああっ♡」

未知の快感に、涙が滲んだ。脚の間の熱が、どんどん濃くなっていく。

ちゅく、ちゅく♡

ちゅぱ、ちゅぷ♡

くりくり♡、きゅっ♡

っん、っん♡

「あっ……♡も、やあっ……♡それ、だめ……っ♡」

「だめって言われると、もつとしたくなるんだよね」

甘く意地悪な声。彼は乳首を軽く歯で挟み、舌尖で執拗に転がし続けた。

「あっ……あっ……♡ラファエル、さま……っ♡……」

「おかしくなっていていい。もつと、おかしくしてあげる」

彼の唇が、乳房から離れ、さらに下へと降りていく。舌尖が、鎖骨から胸の谷間、そして薄い腹部へと、濡れた跡を残していく。

そして、彼の手が、私の脚の付け根に置かれた夜着の裾に、かかった。

さらに、と絹が、太ももを撫でながら捲り上げられていく。月光に、私の脚が、露わになる。

ラファエルは、膝の上で一度、手を止めた。そして、ゆっくりと、私の脚を割り開いていく。

太ももに、彼の熱い手のひらが添えられる。抵抗するでもなく、けれど羞恥で消えてしまいそうになりながら、私は脚が開かれていく感覚を受けた。

脚の間の内腿が、ひんやりとした夜気に触れた瞬間、そこがびっしょりと濡れていることに、自分でも気づいてしまった。とろり、と何かが伝い落ちる感覚。それが何なのか分からなくて、けれど分かっている、私は両手で顔を覆った。

「隠しちゃだめだよ。きみがどんな顔をしてるか、ちゃんと見たい」
手首を掴まれ、顔から引き剥がされる。抗えない力で、顔を上げさせられた。

白い内腿に、吐息がかかる。ラファエルの顔が、信じられないほど、下にあった。

内腿に、ちゅ、とくちづけが落ちる。右の内腿、左の内腿。ちゅつ、ちゅつ、と音を立てて、彼の唇が、脚の付け根へと近づいていく。

彼の銀髪が、私の太ももの内側を、さらさらと撫でる。その感触だけで、脚の間の熱が、ますます濃くなっていく。奥から、とろり、とろり、と溢れるものが、止まらない。

そして、彼の指が、私の下着の縁に、かかった。

絹の薄い布が、脚から引き抜かれていく。

何も纏わない、ありのままの私の身体が、月光と、彼の視線に、晒された。

羞恥で、目を閉じてしまう。

けれど、彼は私の脚をさらに大きく開かせた。膝の裏に手を差し入れ、ぐっ、と曲げさせる。脚の間のすべてが、彼の視線の正面に晒される。

「……ラファエル、さま……っ」

震える声で、名前を呼ぶ。

彼は、私の脚の間に顔を埋めながら、低く、蕩けた声で囁いた。

「いい子。僕だけのミレイユ」

そして、熱い舌先が、私のまだ誰にも触れられたことのない場所に――触れた。

「んうっ あっ♡♡」

びくん、と腰が跳ねた。

ぬるり、と舌が、花弁の合わせ目を下から上へ舐め上げる。その瞬間、視界の端が白く弾けた。

ラファエルの両手が、私の太もを開いたまま押さえつけている。逃げられない。閉じられない。彼の舌は、執拗に、丁寧に、私の秘めやかな場所を味わっていく。

「……すごく、濡れてるね」

恍惚とした声。

「ここ、ずっと疼いてた？」

指先が、くば、と花卉を左右に割り広げる。晒された内側の粘膜に、冷たい夜気が触れ、同時に彼の吐息がかかった。

「や、あっ♡……見ない、で……っ♡」

「綺麗だよ。薄紅色で、とろとろに溶けてる」

ぬちゅ、と音を立てて、彼の舌が花卉の内側を舐めた。溢れ続ける蜜を、舌で掬い取るように。

そして、その舌先が、花卉の奥に隠れていた小さな芽を――探し当てた。

「ひうつ♡♡」

ちろり、と触れただけで、痺れるような快感が腰から脳天まで突き抜けた。私の身体が、びくびくと跳ねる。

「あ、あっ♡、そこ……っ♡、なに……っ♡」

「ここが気持ちいいところだよ」

舌先が、膨らみ始めた芽の周りを、ちろちろ♡と這う。焦らすように、触れるか触れないかの距離で。

「……あ……♡、やあ……っ♡」

もどかしさに、腰が勝手に揺れた。もっと、もっと強い刺激を、身体が求めている。その動きを、ラファエルは見逃さなかった。

「ほしい？」

甘い声。

「ほしいなら、おねだり、して」

「……っ、そ、そんな……」

「じゃあ、やめようか」

わざとらしく、舌が遠ざかる。私の口から、情けない声が漏れた。

「やっ……♡、やめ、ないで……っ♡……そ、そこ……、舐めて……♡、く
ださい……っ♡」

「いい子だ」

ご褒美のように、ラファエルは芽に吸い付いた。

ちゅう♡と強く吸い上げられ、舌先で転がされる。包皮の下から顔を出した小さな粒が、彼の舌の上でころころ♡と転がされ、時折ちゅぱっ♡と音を立てて吸われる。

「ひ、あっ♡、あ、ああっ♡、ラファエル、さまあっ♡」

涙が、勝手に零れた。気持ち良すぎて、自分が自分でなくなる感覚。腰から下が溶けて消えてしまいそう。

彼の指が、同時に、蜜で溢れた入り口に、ゆっくりと触れた。

人差し指の腹が、泉のように零れる蜜を、くちゅ♡くちゅ♡と掬うように塗り広げる。花卉の縁を、指の腹が、ぬる、ぬる、と撫でる。

「……中、ひくついてる」

低い声が、太ももの内側に響く。

そして、蜜で十分に濡らされた指が、ゆっくりと、私の中に沈んでいった。

ぬぷ……っ♡

「ん んっ♡……」

異物感。けれど、それ以上の、満たされるような感覚。十分に解された入り口は、彼の指を素直に受け入れた。

人差し指を根元まで収めると、ラファエルは軽く中を撫でるように動かし始めた。粘膜の襞をなぞるように、ゆっくりと、丁寧に。

「……ここ、感じる？」

前側の、ある一点を撫でられた瞬間――

「ひぁっ♡♡」

私の腰が、がくんと跳ねた。

「ここだね」

嬉しそうに呟きながら、ラファエルはその一点を、くい♡くい♡と指の腹で刺激し始めた。同時に、舌は芽を転がし続けている。

中と外、同時に責められる。

「や、あっ♡、ふあっ♡、だめ、だめえ……っ♡いっしょ、だめ……っ♡」

「だめって言いながら、中がぎゅって僕の指、締め付けてるよ」

指が、二本目に増やされる。ぬぷ♡と、じわじわ押し込まれる感覚。蜜をかき回すように、指が中で動かされる。

くちゅ♡くちゅ♡ぬちゃ♡

粘った水音が、静かな寝室に響き渡る。

舌が、芽を強く吸い上げた瞬間。指が、中の感じる場所を、ぐっと押した瞬間。

私の中で、何か大きなものが、臨界に達しようとしていた。

「……っ♡、あ、あっ♡、なに、か、くる……っ♡、こわ、い……っ♡」

「大丈夫。そのまま、身を任せて」

舌は執拗に、指は的確に、私の敏感な場所を同時に撚り続ける。

瞬間、身体の奥で、何かが弾けた。

「びっ あっ♡♡♡」

視界が真っ白になる。

腰が、ぴんと突っ張った。つま先がきゅう♡と丸まり、中の指を、ぎゅうぎゅうと締め付ける。

初めての、絶頂だった。

ラファエルは、優しく指を抜いてくれた。ぬちゅ♡と粘った音と共に、彼の指が、蜜でびしょびしょに濡れて出てくる。

「……上手にイけたね、ミレイユ」

額にくちづけを落としながら、彼は囁く。

「でも、今夜は、これで終わりじゃないよ」

金色の瞳が、熱を帯びて、私を見下ろしている。

絶頂の余韻に震える私の脚の間に、彼が、ゆっくりと、身を進めた。

絹のズボンの前を、彼の手が寛げていく。

何が起きようとしているのか。

その意味を、私は——ぼんやりとした頭の隅で、確かに、理解していた。

視界の端に、彼のものが、映る。

見てはいけないものを見てしまった、と悟って、慌てて視線を逸らした。

ラファエルの身体の中心に、雄々しく屹立する、彼のものが。想像していたよりも、ずっと大きくて、濡れて、たくましくて——正直に言えば、怖い、と思ってしまった。

あんなものが、今から、自分の中に、入ってくる。

絶頂の余韻でぼんやりとしていた頭が、急に現実味を取り戻して、心臓がばくばくと鳴り始めた。

逃げ出したい、と一瞬思った。けれど、同時に、もっと別の何かが、身体の奥底で騒いでいた。

「こっち、向いて」

頬に、手のひらが添えられる。優しく顔を戻され、目の前にラファエルの顔があった。

彼の瞳は、もう、いつもの聖像のような涼やかさを失っていた。熱に浮かされて、潤み、蕩けて、私を見下ろしている。

その瞳の奥に、愛しさに似た何かを見つけてしまつて——私は、震えながら、ゆっくりと頷いた。

ラファエルの唇が、私の額に触れる。こめかみ、頬、鼻先、そして最後に、深く唇を重ねた。

「……ミレイユ」

唇が触れ合ったまま、彼が囁く。

「きみだけのものに、なる。誓うよ」

教皇にあるまじき、冒瀆的なほどの誓い。けれど、その言葉の真剣さが、私の胸を震わせた。私も、きつと同じように、誓わされているのだと、悟った。

彼のものの先端が、十分に濡れた私の入り口に、そっと押し当てられる。熱い。そして、硬い。

ぴくり、と私の身体が強張るのが、自分でも分かった。ラファエルは、それに気づいたように、額にもう一度くちづけを落とした。

そして彼の腰が、じわり、と沈んだ。

ぬぷ……ッ♡

「……あ、あっ……♡」

異物が、粘膜を押し広げながら、身体の中に入ってくる。指では届かなかった奥まで、ぐぐぐ、と押し進められていく感覚。息が、詰まる。

ラファエルは、一息には進めなかった。少し入れては止まり、私の表情を覗き込み、また少し進む。その度に、私は短く息を吐いた。

ぬぷ……ぬぷッ……ぬぷぬぷ……ッ♡

時間をかけて、彼のものが、私の中に収められていく。どこまで入れば終わるのか、想像もつかなかった。際限がないように感じて、思わず涙が零れる。

指二本を入られた時とは、比喩物にならない圧迫感。けれど、たつぷりと慣らされた身体は、ゆっくりと時間をかけて、それを受け入れていった。粘膜が、彼のものを包み込むように、じわじわと広がっていく。

「……ぜんぶ、入ったよ」

やがて、腰と腰が密着する。ラファエルの掠れた声が、頭上から降ってきた。

彼の胸が、私の胸に重なる。鼓動が、重なる。私の身体の中に、彼の一部が、完全に収まっている。その事実だけで、目眩がしそうだった。

「……ふぁっ……♡、あ、あぁっ♡」

ほんの少し身動きするだけで、中の彼が、ずり、と動く。それだけで、腰から頭の先まで、電流のような痺れが走った。

ゆっくり、と、彼の腰が引かれていく。ずり、ずり、と粘膜が擦れる感覚。奥に収められていた熱が、半分ほど抜かれて、また押し戻される。

ずぷ……ッ♡

「ひ、あぁっ♡……」

最初の一往復で、もう、声が抑えられなかった。二往復、三往復と、彼の動きは少しずつ深く、少しずつ速くなっていく。

ぬぢゅ♡……ぐぢゅッ♡……ぬぷッ♡

中の粘膜が、彼のものを必死に締め付けている。奥を突かれるたびに、子宮が持ち上がるような重い快感が走り、浅い場所を擦られると、花卉の付け根がじんじんと痺れる。

彼のものの先端が、ある一点を、ごつり、と擦った瞬間――

「やぁっ♡♡」

腰が、がくんと跳ねた。指でずっと撫でられていた、あの場所。そこを、もっと太くて硬いもので、じっくりと擦り上げられる感覚。指の時とは比べ物にならない、深い快感が走った。

「……ここ、指で覚えたね」

ラファエルが、意地悪く笑う。そして、同じ場所を狙って、ずり、ずりっ♡と腰を動かした。

「あ、あっ♡、そこ、そこおっ♡」

自分の口から、はしたない声が漏れる。恥ずかしい、と思う余裕もなく、身体が勝手に快感を追いかけていた。

「あっ♡、あっ♡、ラファエル……っ♡、ラファエル、さまつ♡」